

〈大学 報告〉

インターンシップを通じて学生が成長するために

「A大学：キャリアサポート室長」

まず、学生の受入のためにご尽力いただいた山口県インターンシップ推進協議会の皆様、受入及びご指導いただいた企業・団体の皆様に厚く御礼申し上げます。まだまだ成長途上にある学生たちにとり、社会人となるってゆくために、こうした貴重な機会をいただけたことに深く感謝申し上げます。



職業意識の醸成は学校内で学んでいるだけでは限界があります。学外に出て多くの社会人の方と接し、様々な業務を行っていく中で、単なる業務遂行だけにとどまらず、ビジネスマナーや仕事に取り組む上での心構えの違いを肌で感じ、学生は自ら気づいていきます。このような体験を通じて自らの進路について以前より真剣に考えるようになっていたり、大学での勉強でも取り組み方が変わってきたりと、今後の学生生活における目的意識が明確になってきます。学生の変化や成長は、同じ学外での活動であるアルバイトなどとは一線を画すものであると感じます。

また、インターンシップ参加学生はこうした就業体験を通じた成長だけでなく、申し込み、志望動機の作成、各種提出書類の作成・提出、受入先への挨拶や打ち合わせ、スケジュール管理などの事前準備、実施後の各種報告書類の作成や報告会におけるプレゼンテーション準備と実施といった報告関係の作業など、社会人基礎力の養成に必要な様々なことを学び成長していきます。そして、こうした経験は就職活動のあらゆる場面でも、インターンシップ経験者と未経験者での大きな違いとなって現れます。

このようなインターンシップの意義を教職員は感じてはいても、本学においては学生の参加者数が非常に少ないことが現在の課題となっています。資格取得を目指す学生は各種実習が専門必修科目として幅広く行われており、より専門的かつ長期間の実習を課されるものも少なくありません。そうした学生を除いた一般就職希望者の中には就職に向けての意識の低い者も散見され、取り組もうとしない学生の意識向上を今以上に行わなければならない現実があります。加えて、インターンシップに臨むためには、それ相応の「社会人基礎力」が必要です。そのための学生のスキルとしての基盤作り、さらには取り組むための意識向上をどのように行っていくかという体勢の整備が急務です。そのために教職員一丸となって、取り組んでいきたいと考えております。

本学の建学の精神（理念）の中には「他人のために汗を流し、一つの技術を身につける」とあり、明日の社会の要請に応え得る人間教育と専門職業技術教育をその研究の努力を尽くし、独創的頭脳、奉仕の精神・健全な身体を兼ね備えた国際的社会人の育成を大学の目的としています。理念実現のためにも、インターンシップを通じた成長は不可欠です。今後とも、学生が主体性を持って積極的に参加し、社会へと羽ばたいていけるように成長してくれることを願ってやみません。

本校におけるインターンシップへの取り組み

「S大学校：就職統括役」

本校のインターンシップは、学生の就業意識を高め進路決定に役立てることを目的に、講座外実習として実施されています。

インターンシップ先の行政機関や企業等での業務に従事することで、本校で学んでいる知識の有効性を確認し、仕事に対する理解、さらには職業意識の向上や学習意欲の喚起を目標としています。

インターンシップの実施時期は、船舶職員を志望する場合は4年次生の夏季休暇中に、陸上の企業を志望する者は3年次生の夏季休暇中に実施します。本校は、前学期の授業が終わると各学科それぞれに講座外実習があるため、インターンシップの日程が限られますが、そのような状況の中でも44名の受講者がありました。

受講者のうち船舶職員希望者は14名、それ以外の陸上の企業希望者が30名で、そのうち4名が山口県インターンシップ推進協議会でお世話になりました。

私の所属する学生課（就職支援室）は主に行政機関などの公募型インターンシップに対する窓口となります。公募情報の提供の後、各学科で取り纏められた希望学生の推薦から受入決定、実習通知、評価・報告などの文書処理に加え、参加に当たっての指導が主な業務となります。

その他の機関や企業でのインターンシップを希望する学生に対しては、所属する学科において対応を行っていますが、学科ごとの特性の違いからインターンシップに対する指導も異なっています。他大学と就職先が競合することが予測される学科では、積極的にインターンシップへの参加を促す取り組みをしています。

就職支援室が窓口となって行ったインターンシップを見てみると、学生から提出のあった報告書の内容からはしっかりとした成果が伺えます。実際に業務に触れることで漠然とした組織や業務のイメージがより現実のものとして理解できており、体験後の修業意欲も高まっているようです。

今年はインターンシップを実施する企業が急増しました。しかし、その日数や中身は多様化しています。その点、山口県インターンシップ推進協議会では、大学側が求めるきちんとした就業体験を実施する企業をコーディネートしていただけるので、学生にも安心して勧めることができました。

夏季インターンシップに関する業務は、4月から9月までの長期にわたる上、4年生の採用選考時期と重なり、限られたスタッフの中でしっかりとした対策や指導を行うためにはかなりの労力が必要となりますが、今後も工夫をしながらサポートに努めたいと考えています。

最後になりましたが、受入事業所の方々や山口県インターンシップ推進協議会の皆様には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。



職業人を培うために

「G短期大学：進路支援センター・センター長」

音楽・デザインアート・キャリアプランニングの三つのコース制をとっていた本学の芸術表現学科は、次年度からコース制を廃止し、自由度の高い授業選択ができるフィールド制に生まれ変わります。コンセプトは、“デザイン×音楽+職業人力”で、芸術を学ぶことを通して感性を磨き、表現力を豊かにしながら、併せて職業人に必要な確かな知識とスキルを身に付けようとするものです。このようなミッションを果たすために、キャリア教育の一層の充実を図ることとしており、その重要な要素としてインターンシップを位置づけています。

現行は1年の選択科目で、約4割の履修率に留まっているため、1人でも多くの学生が履修するようにオリエンテーションなどで働きかける予定です。また、夏季休業を利用した短期インターンシップのみを実施していますが、今後は春季休業の利用、長期間にわたるもの、課題解決型などにも取り組んでいければと考えています。さらに、インターンシップを通じて体得した力を一層活かせるよう、事前・事後指導の内容や方法、評価の在り方等についても、これまで以上に工夫・充実を図ることが課題であると捉えています。県内就職希望が大多数を占める本学にとって、県内事業所でのインターンシップは様々なメリットがあり、インターンシップを通して産学連携を図ることも重要な課題です。今回、事前打合せ等で事業所の皆様と関わる中で、若者の成長に期待し、育てようとしてくださるお姿に接し、大変心強く感じました。このお気持ちに応えるためにも、教育機関としての使命を再認識し、連携を図りながら職業人力の育成に取り組んでいきたいと考えています。

短期大学という性格上、学生は十分な準備ができないうちにそこに魅力を感じた」と、仕事のやりがいを見出した者もいます。さらに、就職活動を開始しなくてはなりません。働くということに対して漠然とした気持ちしか持たなかった学生が、インターンシップを通してその意識を土台から揺さぶられ、覚醒し、覚悟を持つようになっていく様を傍らで見ていると、体験することの大切さを改めて痛感します。学生の感想には、「何もわからなかった自分に丁寧に一から指導してくださったお陰で、いつの間にかできるようになっていて自信がついた」、「笑顔で接してくださったので緊張も解け、励ます力の大きさを感じた」といったように、不安で一杯だった学生が次第に仕事に慣れ、自信をつけていった様子が窺えます。また、「裏方の仕事は、達成感が後からやってきて、は、「これまで利用者の側からでしか捉えていなかった業務を、提供する側から体験することで新たな発見がたくさんあった」という声も聞かれ、多角的な視点で物事を捉えられるようになり、意識の幅も広がったように思えます。

貴重な経験の場を提供していただきました事業所の皆様、事前研修会やマッチング等で全面的な御支援をいただきました山口県インターンシップ推進協議会の皆様に、心から感謝申し上げます。



経験から学ぶ力

「K大学：高等教育センター・

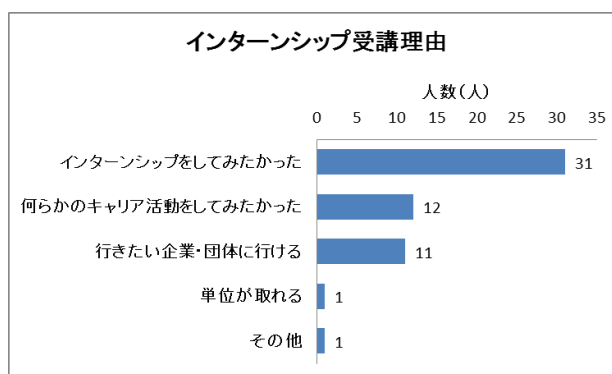
インターンシップコーディネーター」

この夏、本学からは64名の学生が山口県インターンシップ推進協議会のインターンシップに参加させていただきました。まずはこの場をお借りして、学生の学びのため受け入れにご協力いただきましたインターンシップ推進協議会の皆様と各団体の皆様様に、一言お礼を申し上げたいと思います。

さて、本学ではインターンシップ推進の取り組みといたしまして全学教育科目「インターンシップ」を開講しております。本年は正課（履修登録あり）59名、課外（履修登録なし）4名の学生が受講し、山口県インターンシップ推進協議会夏のプログラムに参加いたしました。学内での事前授業では申込方法の説明だけでなく業界・企業研究や各自の目標設定、マナー講座、インターンシップ終了後には公開インターンシップ報告会を開催しております。事前指導では特に「なぜその事業所を実習先として選択し、何を学び、どのように今後活かすのか」という明確な目的意識を持ち、インターンシップに臨めることを目的として指導をしています。

去る9月29日に開催した報告会では、協議会のコーディネーターの皆様にもおいでいただき、学生たちがそれぞれの研修先から持ち帰った経験をグループワーク形式で報告し合いました。グループワークでは、社会人にとって必要な能力とは何か、また、その能力を身につけるためにこの後期から自身でできることは何かを話し合いました。インターンシップとして現地で学ぶ体験は学生にとってもちろん貴重ですが、インターンシップの経験を振り返り、自身の活動を俯瞰して分析し、そこから課題を発見する事後学習が大変重要と考え、いただいた経験を余すことなく自身の成長につなげる教育を目指しています。

インターンシップ報告会において、正課インターンシップの受講理由についてインターンシップ報告会参加者58名を対象にアンケート調査を実施しました。有効な56回答を集計した結果、上位から順に「インターンシップをしてみたかったから」31名、「何らかのキャリア活動をしてみたかったから」12名、「行きたい企業・団体に行けるから」11名、「単位が取れるから」1名、「その他」1名という結果になりました。「その他」1名については「親の勧め」という回答でした。この結果から半数以上がインターンシップの経験を希望する学生であり、インターンシップが純粋な教育活動であると学生が認識していることがわかりました。近年インターンシップが就職活動の一環として扱われることが問題視されており、企業説明会や選考活動直結と見られるインターンシップが増加しています。しかしながら教育としてのインターンシップは学生の主体的な学びであり、このプログラムを通し、経験から学ぶ力を身につけてこれからのキャリアを形成して欲しいと願っています。



本学でのインターンシップ推進

「T大学：経済学部長」

本年度、山口県インターンシップ推進協議会の夏季インターンシップ・プログラムとして、本学より32名が県内事業所等において実習に取り組みました。受け入れ事業所の皆様のご支援、ご指導もあり、大きなトラブルもなく32名が無事実習を終えることができました。

実習から戻ってきた学生の声やレポートから、一人ひとりが就労について多くの学び、気づきを得た様子が伝わってまいりました。顕著だったのは、アルバイトとは異なる、仕事に取り組む責任感を自覚できたという学生が多かった点です。実習生のほとんどはアルバイト経験を有し、仕事をするには慣れていますが、それでも、実習ではアルバイト賃金を得るための仕事とは異なり、学びの意識を持って仕事に向かったことがうかがえます。さらに、今後の就職活動さらにはその先をにらんで、今の自分自身に足りない能力に気付いた、という振り返りも多く見られました。パソコンスキル、コミュニケーション能力、積極性など、具体的には様々です。短期間の実習とは言え、今後の残された学生生活における各自の課題発見につながったことは、インターンシップによるキャリア教育の重要性を示していると言えます。

現在本学では、COC（「地（知）の拠点整備事業」）の一環としても、山口県インターンシップ推進協議会の事業を推進しています。今回の実習参加学生のうち過半数は、留学生も含めた県外出身者でした。そうした県外からの進学者に県内での就労の学びの機会を与えさらには県内就職の意識向上につなげる、これはCOC事業さらにはその基盤である地方創生に大いに寄与する取り組みです。就職活動支援サイトのサービス充実化により実習先を探す手法が手軽になりかつ多様化する中でも、推進協議会を中心とする本事業の意義は大きいでしょう。

そこで、本事業の一層の推進に向けて、以下に2点提案させていただきます。1つめは、本事業とCOC+事業との一層の連携です。上述の通り、山口県インターンシップ推進協議会によるインターンシップ事業は、地方創生が目指す県内の企業等への就職実績向上に向け重要な役割を担っています。COC+のより中心的事業に位置づけ、関連事業との連携をさらに強めてはいかがでしょうか。

2つ目は、各事業所での実習生受け入れの予定日程を参加申込み前に開示いただければ、参加申込み者の増加につなげうるという点です。夏休み期間中は集中講義や資格取得関連の実習、様々な課外活動が予定されており、インターンシップの日程が重なる可能性があることから申込みを断念して、その代わりに実習日が明示されている就職活動支援サイトのインターンシップにエントリーしている学生が散見されます。事前に日程がわかる事業所等を増やせば、そうした学生を県内企業での実習に取り込める可能性が高まるでしょう。

最後になりましたが、本年度も大変お忙しい中をインターンシップ実習生の受け入れにご協力いただいた県内の事業所等の皆様、さらに実習先との連携等で大変お世話になった山口県インターンシップ推進協議会および関係の皆様、心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

インターンシップの取り組みについて

「B大学：キャリア支援センター事務部長」

本学のインターンシップは学生の自主性を重んじた推進と取り組みを行なっています。今年は民間サイトを利用した1日実施型のインターンシップに多くの学生が流れ、参加学生が昨年度と比較して大幅に減少してしまいました。山口県インターンシップ推進協議会にもご迷惑をおかけしてしまい、大変申し訳なく思っております。結果として、今年度は8名の学生が貴協会のインターンシップに参加しました。本学は文学部で司書資格の取得を目指す学生が多いこともあり、図書館・博物館が3名、旅行会社3名、運輸1名、放送局1名という内訳でした。

インターンシップは学生にとって、社会を知る大変意義深いことだと思っています。ただ、企業側からすると社会的な意義は高いものの大変負担感の大きいことも事実。それ故、学生をしっかりモチベートして送り出すことが肝要と認識しています。学生には、気軽な気持ちで参加するのではなく、社会人の一員として扱われるインターンシップ制度を通じて、自分自身の職業能力や実力、今後、仕事を通じた自己実現に対して、何が足りなくて、何を努力していかなければならないのかを認識できるような指導を心がけています。

実施前の事前指導では、主にインターンシップの目標を設定させ、その目標に添ってどう取り組むかを指導。加えて、社会人としての最低限のマナーを学ばせてからインターンシップに臨ませました。インターンシップ終了後はレポートの添削を通じて、学生に自らの体験の振り返りをさせています。

学生からの声としては、「社会人としての厳しさを感じた」「職業のシビアな場面を目の当たりにした」「業務は思っている以上に大変」といった仕事の厳しさを実感する内容の感想や、「私が思っていた以上に仕事の幅が広いということがわかった」「毎日が喜びと新鮮さに満ち溢れていました」「自分が目指したい職業を体験でき、社員の方の仕事に対するリアルな声を聞けるなど素晴らしい経験をさせて頂きました。この経験によって、自分に不足している知識や新たな課題を見つけ、当業界へ行きたいと思う気持ちが強くなりました。」など、志望業界の業務内容を深く知る、仕事のやりがいを発見するなどの学びや気づき、さらに「体験をさせていただいたことに心から感謝しており、この経験をこれからの大学生活、就職活動、そして、就職してからも私の糧として、目標として心に留めていきたい」「今後の就職活動に対してどう向き合っていけばよいかを知る良い機会になったと実感」など、今後の就職活動の指針を得た学生も多数おり、今回のインターンシップが学生にとって、学びの多い有意義な一時であったことが確認できました。

インターンシップに参加した学生は、自身の甘さ、最低限のマナー、社会人としての職務遂行を体験し、一回りも二回りも成長した姿を見せるようになりました。このような機会を今後も継続し、学生の学びが深まるインターンシップにしていきたいと気持ちを新たにしています。

最後になりましたが、学生の受け入れのためにご尽力いただいた山口県インターンシップ推進協議会の皆様にはこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。